

NO.2 福原中だより

川越市立福原中学校
校長 柳 充
2021. 5. 6 発行

【目指す学校像】生徒全員がここで学べてよかったと思える福原中学校
～歴史と伝統ある福原中を生徒たちにとっての真の母校とする～

【目指す生徒像】

☆思いやりのある生徒

☆自ら学び、自ら考え、自ら行動する生徒

☆やり遂げる力を持った、たくましい生徒

☆自らの学校を愛し、郷土を愛し、その発展に尽くす生徒

挑戦の先にあるもの

校長 柳 充

エジソンは、今からおよそ 170 年前に、アメリカ合衆国で生まれた発明家であり起業家です。きっと皆さんも、その名前は知っていると思います。

エジソンの発明の中で、今でも私たちの生活を便利かつ豊かにしてくれているものに「白熱電球」があります。エジソンによって「白熱電球」が発明される前は、明かりといたら、ろうそくかランプでした。光量も弱く、風などですぐに消えてしまうランプやろうそくに比べて、電球の発明は、まさに画期的な出来事でした。

「夜でも昼のように、光で明るく照らされる世界をつくりたい」、そんな思いからエジソンは「白熱電球」を発明しました。それは世紀の大発明ですが、私が驚いたのはその発明の過程です。

電球の発明は、最初から上手くいったわけではありません。長時間、光を出し続けるためには、フィラメントと呼ばれる電球の中の光る細い線が、電気を通して熱くなっても切れないことが必要でした。つまり、フィラメントの素材を何にするのかが一番の難題だったのです。新しい素材を試しては失敗、また新しい素材を探して試してみても失敗…、そのくり返しが続きました。皆さんがエジソンなら、何回ぐらいまであきらめずに挑戦できるでしょうか。

エジソンは、成功するまでに、何と二万回近く（八千回などの説もあるそうです）実験をくり返したと言われています。今までに目標を達成するために二万回も挑戦したことなど、私にはありません。

工場で手に入る素材では全部うまくいかなかったため、エジソンは植物に目をつけました。ブラジルのアマゾンやフロリダの湿地など、世界中から 500 箱もの植物を、彼は集めて実験してみましたが、どれも駄目でした。

そして、とうとうエジソンはフィラメントに適した素材に出会いました。それは、日本の京都の石清水八幡宮の竹でした。エジソンの大発明には、日本が大きくかかわっていたのです。

ある新聞記者が質問しました。「何万回も失敗してあきらめようとは思わなかったのですか。」そのときに、エジソンは次のように答えたのだそうです。「あれは失敗ではありません。上手くいかない方法を一つ一つ確かめたのです。あきらめることこそが失敗なのです。」

エジソンの不屈の精神による挑戦の結果、誕生した電球は、今でも私たちの生活を明るく照らしてくれています。もし、エジソンが一万回であきらめていたら、私たちの今の生活は暗闇のままだったかもしれません。

エジソンは一万回以上の挑戦の結果として「白熱電球」を発明しました。人間は、何度も失敗して、間違えて、それでもまた挑戦して…、そうやって成長していくものです。「挑戦の先には成功か学びのどちらかしかない」と言われます。つまり、失敗とは学びの別名なのです。

福原中の皆さん、どうか失敗や間違えを恐れず、何事にも挑戦して、自分の力や可能性をどんどん伸ばしていってください。福原中が、皆さんが大きく成長するための場となるように、先生方はいつでも応援しています。